

## シンポジウムを終えて 人生という必修科目に必要なもの

鈴木 秀一

今回のシンポジウムについて、司会者の主観的感想を含めてまとめてみたい。シンポジウム全体の構成は、事例報告3つ（「対人コミュニケーション」「仕事と人生」「信じることと、生きること」）および総括的なコメントとフロア・ディスカッションから成っている。それぞれの興味深い内容は本文に譲ることにして、司会者の視点からは、このシンポジウムは少なくとも3つの事柄を示唆したと感じた。

1. 全カリが大学改革における教養教育の稀な成功事例といわれるのはなぜか。
2. 教養は「専門」と二律背反ではなく、互いに支えあうものである。
3. 人生という必修科目を取得するためには「教養」というものがなければならない。

大学改革における要の1つは一般教育部の解体であり、国立、私立を問わず多くの大学で一般教育のプレゼンスが薄れてきた。その中で、本学の全カリは稀な成功例と称されてきた。これはもちろんリベラルアーツを本意とする本学の伝統に由来する。しかしその伝統をどう実践するかということは、また別のことである。その点で全カリには授業を担当する側と受講する側に、他の大学にはみられない熱意がある。今回、立教科目と関係が深い総合B科目の事例報告を拝聴して、各担当者と学生の授業への思い入れがひしひしと伝わってきた。また同時に、それぞれが取り上げているテーマの今日性、社会的な意義の高さにも驚

かされた。

たとえばゲーム世代、少子化世代と呼ばれる「今どきの若者」が他者とのコミュニケーションを不得手とすることはしばしば指摘されている。「対人コミュニケーション」はこの問題と丁寧に向き合い、コミュニケーションの大切さを受講生とともに考え、人間が生きていく過程でコミュニケーションが果たす役割を理論・スキルとして教えている。

「仕事と人生」が教えるのは便利な就職情報などではなく、職業生活ないし仕事というものをあなたの人生の中でどのように位置づけるのかという、はるかにアカデミックで本質的なことを提示している。この科目では、仕事というものを通じて社会の中で生きることについて、職業を通じた人生の希望について考えているのである。

「信じること、生きること」では、多様な価値観と生き方を具体的に示すことによってあなたの人生を再確認しなさいというメッセージを感じた。たとえばマイノリティに対する認識を深め、自分の人生を再確認する作業は、必ずしも容易な精神的作業ではあるまい。むしろ往々にしてそれは自己の省察と、言葉の最上の意味での自己批判につながる困難な試みであろう。その試みを受講生に課すことによって、この授業は「今どきの若者」の心に一生の財産を与えようとしているように思う。

しかしここで「青春」をとうに過ぎた私は考えこまざるをえない。他人とコミュニケーションすることができずに、長いも

のに巻かれたり、一人でいじけたり開き直ったりする「今どきの若者」とは私自身ではないのか。仕事の意味を見失い、「ワーク・ライフ・バランス」のない日々を時として喪失感にさいなまれる「今どきの若者」とは私自身ではないのか。日常生活の中に逃げ込んで、自分の狭い経験則と価値観を至上のものとし、それ以外の価値観や生き方を安易に否定することで平板に生きている「今どきの若者」とは私自身のことに他ならないのではない。

そう思うと私にとって、報告された事例は若い世代の教育論でも大学改革の制度論の話でもなくなる。それはまさに私の人生のコアに属する問題となる。

「人生の真実」とか「本当の人生」というものがもしあるとしたら、それをどう把握し、どう生きればいいのか問われているのは大学生や若者だけではないはずである。全カリのミッションにある「教養」というものは、特定の世代、特定の教育機関だけに必要なものではない。それは通貨のように、社会生活をおくる誰にとっても必要なものなのだ。なぜなら、「精神なき専門人」(Max Weber)たる現代人にとっても、自分の人生に「意味」(Sinn)を見いだす必要があり、教養はそのために必要なものだからである。もちろん人生は、誰にとっても落とすことのできない必修科目であることは言うまでもあるまい。

こうして今回のシンポジウムをふりかえてみると、「教養ある専門人」より「専門性に立つ教養人」を育てようという全カリのミッションの今日的な意義と困難が明らかになるように思う。

「専門性」と「教養」、それは相反するものではない。むしろわれわれの身体の筋肉と骨のように互いに支えあい、互いに高めあうものである。いったい身体は筋肉で保たれているのか、それとも骨で支えられているのか、などという議論は

言葉の遊びにすぎない。今日ますます「専門」化へのプレッシャーを受けつつある大学教育の中で、本学ほど「教養」教育に注力し、それに成功してきた大学はなかる。そのために本シンポジウムの事例報告にみられるような大変な努力がなされてきたのである。しかしながらシンポジウムのディスカッションにみられるように、「教養」とは何か、またそれはどのように「教育」すべきものなのか、についての検討と実践はまだようやく端緒についたばかりなのかもしれない。われわれの今後の課題とすべきであろう。

すずき しゅういち

(本学経営学部教授、全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目担当運営委員)